

大日本耳鼻咽喉科學會中國地方會第32回集會記事

期 日 昭和11年2月23日午後2時より

場 所 岡山醫科大學第1講堂

幹 事 高 原 滋 夫 記

開 會 の 辭

田 中 文 男

只今より開會致します。本日は生憎大阪神戸にて同じく耳鼻科集談會が催されるさうでありまして、其の地方の會員諸兄中に御出席出来ない方があります事は甚だ残念であります。尙ほ又本月は感冒流行のため耳疾患者が多く、會員諸君には大變御多忙の事と思はれますに拘らず、多大の犠牲を拂つて遠路を厭はず御出席下さつた方も多數御見受け致します。謹んで感謝の意を表します。

1. 喉頭實扶的里の治療に就て

淺 黃 山 喜 雄

演者は、昨年末より本年に互り襲來せる實扶的里は義膜形成が單に咽頭の上に止らず更に深部氣管枝内に下降する傾向を有し、更に其の毒性も強烈なる如く、例年の實扶的里に比し甚だ高度の死亡率を有するを注意し、次に最近演者の経験せる重症實扶的里の1例(8歳の女兒)に於て入院當時血清の普通量の注射と共に氣管切開を施し一時安靜を得たるも、更に下方氣管枝内に進行せる炎症の爲再度ならず呼吸困難の發作に襲はれしも、其の都度氣管切開孔より氣管枝鏡を挿入し氣管枝内の義膜を剝離し、又は粘稠分泌物を除去し一時的とは云へ常に著效を収め得て窒息より免れせしめ得たる経験を述べたり。而して演者は本例並本年の實扶的里に見らるる如き惡性のものに於ては、從來使用したる血清量を以てしては到底炎症の阻止は困難なる故、大量の血清注射を試みるべしと

し、更に氣管切開施行後尙ほ呼吸困難の發作ある場合は氣管枝鏡にて充分氣管枝内を検査し、義膜又は分泌物、往々亦剝離せる義膜片による氣管枝内閉塞を除くべく勉むべしと主張せり。

2. 鼻中隔後端より發生し鼻咽腔を充たせし黑色癌腫の1例

登 坂 清

惡性黑色腫は比較的稀有なる疾患なるも極めて惡性なるにより吾人臨牀醫家の忽にすべからざるものなり。而して從來の文獻に徴するに黑色肉腫に比し黑色癌の報告は殊に甚だ稀なるを見る。演者は近時偶々鼻中隔後端より發生し鼻咽腔を充たせし黑色癌の1例に遭遇し、腫瘍の黑色を呈する特有なる臨牀所見により幸に之が早期診斷を下し得て、略ぼ完全に腫瘍を剔出し得たりと信するが故に、之が臨牀的所見の概略を報告し、併せて其の組織標本を供覽せり。

患者は63歳の男、生來全く健康なり。約2箇年前より時々原因不明の可成強き鼻出血あり、其の頃より漸次右側鼻閉塞を來し、約6箇月以來右側鼻腔は全く閉塞し、且血液を混ぜる鼻汁を多量に分泌するに至れり。診るに右側鼻腔には血液膿性の鼻汁を以て充たされ、其の後端には暗紫色、表面凹凸不平、弾力性硬度、出血性の腫瘍ありて、該腫瘍は鼻咽腔に及び其の大半を塞ぐ。其他の臓器に轉移無く、頸部淋巴腺に腫脹を認めず。「メラニン」尿陰性なり。之に對しデシケル氏惡性腫瘍手術々式に従ひ、上顎齶を開放し其の内壁を下甲介と共に除去する事によりて腫瘍に達せり。而し

て腫瘍は右側鼻中隔後端粘膜より發生し更に鼻底粘膜の一部とも癒着を來し居たるも、略ぼ完全に之を剔出し得たり。組織學的に初期の黒色癌なりき。

3. 耳性化膿性腦膜炎と竇血栓及び 腦膿瘍併發の1例

原 良 太 郎

患者は40歳の女子、約3週日前の風邪に原因して右側中耳化膿症に罹り、夫れより乳嘴突起炎を惹起し、爾來耳科醫の再三の勸告に拘らず今日迄手術に應ぜずして、漸次症狀増悪し遂に岡山醫科大學耳鼻科を訪れしものなり。診るに患者は全身的竝に局所所見甚だ重篤なり。依て即日シュワルチエ氏手術を施行したるが、術後3日目に至るも體溫依然として高く症狀の輕快を來さざれば、茲に腦膜炎を疑ひて腰椎穿刺を行ひしに、壓120mm、液正常なるにより5ccの液を採取せるのみ、然るに其の夜惡寒戰慄ありて體溫40度を越えし故に翌朝再び腰椎穿刺を試みしに昨日と異り液は著しく渾濁を呈せり。更に其の際クエツケンステット氏試験を併せ行ひ竇血栓を思はしむる壓差を證明したれば、手術時骨内板に何等の變化を認めざりしも手術的に之を検討し、S字狀竇上膝に竇血栓を發見し之を剔出したる。

次に腦膜炎の治療として小田式腦脊髄液持續排出法を行ひしに液は漸次清澄となり開始後5日にして殆ど透明となりたり。然れ共其の後腦脊髄液中に纖維性浮游物を生じ排出管が度々閉塞さるに至り、依てホルムグレン氏法による側橋槽排膿法を行ひしに其の際偶然にも小腦膿瘍を發見せり。演者は當初本例に於ては腦膿瘍を全く考慮外に置き居たるも、茲に至り本患者が體溫高きに拘らず脈搏數比較的僅少を示せし臨牀的所見と相適合するものあるに想ひ至れり。

本患者は不幸にして其の後症狀漸次増悪し、恐らく近き中に鬼籍に入るものと思はるるが、斯く生前臨牀的に之等總ての頭蓋内合併症を發見し得たるは診斷上の進歩にして、察するに本例の如く多くの頭蓋内合併症を併發する事は吾人の考ふるよりも案外多きも、通例其の一つを以て他の合併症の陰蔽さる事多かるべしと述べ、更に演者自身本例に於て又次の點を注意せり。(1) 試験的腰椎穿刺の際はなるべく大量の腦脊髄液を採取する事。(2) クエツケンステット氏試験のみによりて竇血栓の存在を疑ひし端緒を得たる事。(3) 腦脊髄液の持續的排出が腦膜炎に對し甚だ有效なりし事。

追 加 田 中 文 男

昨年5月ウインの耳科學會に於てオットー・マイエルが耳性腦膿瘍の治療法として、腦膿瘍を切開せる後「ヨードフォルムガーゼ」を填め其の儘3、4週日間放置する方法を提言し、之に據れば「ガーゼ」の刺戟によりて膿瘍腔の周壁に結締織の被膜形成が促進さるが故に病變は其部に限局され、爲に從來の方法に於て屢々見らるる如く折角膿瘍を切開排膿するも其の後に來る周圍腦質の軟化により死の轉歸を取る如き事殆ど稀なりと述べたり。而して氏は從來の方法を以てしては豫後不良なりと惟はれたるものに於てすらも、該方法によりて克く治癒せしめ得たる數例の經驗を報告し、ウインの學者達多數の賛同を受けたり。然るに後にウツフエノルドは此治療法に反對したるが、之に對しオットー・マイエルは「若しウツフエノルドの反對を信ずるものあれば今迄同様患者の不幸は減ぜざるべし」と一矢を酬ひたるは寔に味はふ可き言葉ならん。

演者も若し此方法がマイエルの云ふ如く效果あるものなれば結構至極と考へ、最近偶々今演述せ

られたる症例に遭遇したれば、此「フアルムガーゼ」の長期挿入を試みたるに、患者は大變氣持良しと云ひ居れり、但し本方法の効果價值に關しては今後の研究に俟つ所多く直ちに斷言を憚るものなり。

4. 口蓋内被細胞腫に就て

川 本 重 雄

演者は發生部位に於て從來の報告例と少しく趣を異にせる口蓋内被細胞腫の1例を報告せり。

患者は69歳の女子、2年前より咽頭の腫瘍に氣付きしも放置し居たるに漸次増大し、嚥聲、閉鎖性鼻聲、嚥下障礙、及び睡眠時右側横臥位をとるに呼吸困難を來す等の自覺症狀を訴ふ。局所を診るに小鶏卵大の球形の腫瘍が懸壺垂より左側口蓋弓の一部に互り附着懸垂し、恰も懸壺垂の肥大せる如し、表面滑澤、少しく凹凸あり、淡紅色、彈性性硬、手術的に容易に剝離剔出し得たり。組織學的に淋巴管内被細胞腫と診斷されたり。

5. 頰部放線狀菌病の1例

高 原 滋 夫

演者は最近、左側下顎健康大臼齒外側齒齦部に初まり漸次同側頰部に及びたる板狀硬度の頰部腫脹を有する33歳の鐵盤工を診察し、腫脹の板狀硬結、腫脹著明なるに拘らず發熱其他刺戟症狀の缺ける點、並頸部淋巴腺の腫脹無き點より先づ放線狀菌病を疑ひたるも、曩に地方醫により加へられたる口腔内切開創よりの分泌膿汁中に放線狀菌「ドルーゼ」を發見し得ざりし爲或は淺膜腫、肉腫に非ざる乎と迷ひ、遂に再三の膿汁検査の後幸に放線狀菌「ドルーゼ」の檢出に成功し以て漸く之が放線狀菌病たる確定的診斷を下し得たる經驗を述べ、之に對し「ラヂウム」針腫瘍内刺入療法、「レントゲン線」照射、沃度加里内服、「スペチヨード」

液注射等により輕快を來さしめつつあるを報告したり。

而して一般に放線狀菌病は顔面頸部に好發するとせらるるが故に耳鼻科醫は平素之に接する機會比較的多きものならんも、我領域より此報告例の尠きは放線狀菌病に關する認識の輕薄なるに由るならんとし、之が診斷に當りて腫脹の板狀硬度、刺戟症狀の輕微なる事、頸部淋巴の腫脹無き點等を目標にすべしと述べ、岡山醫科大學耳鼻咽喉科教室にて最近數年間に治療されたる放線狀菌病患者數人の寫眞、組織標本「ドルーゼ」等を供覽したり。

6. 中耳組成の遺傳と中耳炎との

關係に就て 岡 崎 衛 生

演者は中耳炎の家系的簇生に對し乳嘴突起の含氣狀態及びそれより推測し得る中耳粘膜の性状即ち局所的要約が如何なる影響を及ぼすものなるかを知らんとし、多數の中耳炎罹患者を擁する20家系146人に就て「レ線」的に調査せり。材料に於て注意すべきは耳炎は慢性或は急性の一方に偏して多發するを常とせることなり。

以上兩群に於ける乳嘴蜂窠を各家系別及び統計的に觀察せる結果、慢性耳炎の家系に於ては蜂窠の發育度僅少なるもの甚だ多く、之に比し急性耳炎の簇生せる家系に於ては蜂窠の發育概ね良好なるも排列不規則なるを知り、こは中耳炎の家族的簇生と乳嘴突起の含氣狀態との間には密接なる關係あるを窺ふに足ると共に耳炎の家族病理により一層の注意を拂ふ必要あるを思はしむと述べたり。

7. 一耳性横竇血栓例の臨牀

松 浦 祐 一

演者は最近20歳の男子にして、左側慢性中耳化膿症より乳嘴突起炎及び竇血栓を惹起せし1症

例に於て、手術時S字狀竇上膝の上方約5 cmより下膝の直下に至る閉塞性血栓の存在を認め、之に對し内頸靜脈結紮竝に血栓剝出術を施したり。然るに斯く原病竈を完全に除去せしに拘らず依然として毎日數回に亙る惡寒戰慄を伴ふ所謂間歇熱を繰返し、更に術後6日目より漿液性腦膜炎を來し、更に9日目より一般症狀惡化し心臓衰弱の徴現はれ一時は鬼籍に入るかと危ぶみたるも、之に對し全身療法として殊に輸血を繰返し、更に頭痛に對しては1日數回煩を厭はず腰椎穿刺により腦脊髄液を排出するに努めたるに、術後19日にして漸く下熱し、さしも重篤なりし一般症狀も亦快方に向ひ、其の後良好なる経過を辿り全治退院を見るに至れり。

演者は本例に於て斯く竇血栓を完全に剝出せしに拘らず其の後19日間の長期に亙り間歇熱停止せず、而も其の間漿液性腦膜炎をも合併せしが、保存的療法のみにより克く之を治癒せしめ得たるは臨牀上興味ある事なりとし、更に其の治療に當り輸血が毎度著明なる効果を齎したるの外、腰椎穿刺の反覆も亦患者の頭痛輕減に大に著效を來したりと述べたり。

8. 耳性漿液性腦膜炎に就て

尾崎 嚴 衛

演者は岡山醫科大學耳鼻咽喉科に於て昭和6年より昭和10年に至る5箇年間の入院患者中より、臨牀上多くは頭痛、發熱、不眠、不機嫌、全身違和等の不定症狀を呈し、透明なる腦脊髄液にして著しき壓上昇を見、蛋白は多くは正常なるも時に生理的限界を越え、細胞も多くは正常値、又は淋巴球のみの多少の増加を伴ふ事あるも、腦脊髄液排除により治癒せしめ得、而も初期或は限局性化膿性腦膜炎と區別し得る1群(38例)の存在する

を指摘し、斯る漿液性腦膜炎は乳嘴突起炎の際注意すれば左程稀ならずと説き、次で性別、年齢、患耳側、原病竈の性質、他の頭蓋内合併症の有無等を統計的に觀察し、更に小兒にありては其の訴ふる所が明瞭を缺くため所謂癡癖として看過され易ければ特に注目を要す可く、又小腦膿瘍を疑はしめたるものに於て手術に際し側橋槽に腦脊髄液の滯溜せるを確め、之を誘導する事によりて全治せしめ得たるものを述べ、稀なりとは言へこの點に就ても臨牀上常に深甚の考慮を拂ふべき事を強調せり。

9. 耳性腦竇竝に内頸靜脈血栓に對するグルーネルト氏大手術に就て

小田 大 吉

演者はグルーネルト氏大手術の術式を紹介し、横竇より頸靜脈球竝に内頸靜脈に蔓延せる耳性腦竇血栓の3例に之を試み、1例は其の後化膿性腦膜炎のため死亡せしも、2例に於ては一般症狀竝に局所症狀共に不良なりしに拘はらず本手術により救ひ得たる経験を述べ、元來耳性腦竇血栓に於て病變が球及び内頸靜脈に及ぶ際と雖も必ずしも球の開放手術を行はずとも治癒する事稀ならざるは演者等の教室の統計的觀察に見るも明かなれども、演者の例の如く球及び内頸靜脈血栓が既に化膿に陥り其の周圍の頭蓋底にも膿瘍を形成せる場合には單に竇手術又は内頸靜脈に對する處置のみを以てしては著效を期待し難く、又球の處置に當りてもフオス等の簡單なる術式を以てしては困難にして、斯かる際こそは本術式を選ぶべきを主張し、一般に血栓が横竇、球竝に内頸靜脈に連絡し、既に試みられたる竇及び球手術又は内頸靜脈に對する處置が特殊の效果を示さざる際は進んで之を應用すべきものなりと述べたり。

10. 「トラホーム」の鼻腔及び咽頭感染 に關する卑見

山 口 治

組織學的に眼瞼結膜と咽頭粘膜とを比較するに兩者相類似し、又鼻腔殊に涙管開口部も亦淚囊と相近似するの性狀を有するに拘らず、「トラホーム」疾患が單に眼のみに限られ之と相連なる鼻腔及び咽頭に何故感染せざるかに關し何人も疑問を抱かざるは寔に不可思議なり。演者は平素より此點に疑問を有し「トラホーム」重症者の鼻腔及び咽頭を注意觀察せるも未だ何等肉眼的病變を發見するに至らず、尙ほ川本重雄學士も「トラホーム」罹患兒童の「アデノイド」を切除し精細に之が顯微鏡的検査を續け居るも未だ「トラホーム」性病變を指摘し得るに至らず。更に演者は最近1看護婦の犠牲的好意により、其の下甲介粘膜下に「トラホーム」患者の驗板乳劑(驗板摘出後直ちに生理的食鹽水を以て10%の乳劑とす)を極少量注射し觀察するの機會を得たるが、其の所見は移植後3—4日間は注射部位に輕度の發赤腫脹を見るも約1週日の後には夫等症狀全く消失し肉眼的には何等の變化を認め得ざるに至る。1箇月後該部を切除し組織的に檢せしに粘膜下に「プラスマ」細胞の浸潤、新生血管及び結締組織の増殖等肉芽組織像を呈するを認めたり。(組織標本の寫眞供覽)。此事實より演者は鼻腔及び咽頭に於ても極く輕度の「トラホーム」感染性を有するものに非ざるやと推測したるが、此問題に關しては今後更に研究を續け再び報告する所あらんと述べたり。

11. 扁桃腺周圍炎の一異型としての 口腔底膿瘍に就て

田 中 文 男

急性扁桃腺炎或は扁桃腺周圍膿瘍より來る種々重症な合併症中近年注意され初めたるものに副咽

頭間隙の炎症あり。之は從來は頸部蜂窩織炎又は其の他の名稱により呼ばれたるものなるが、解剖的關係より副咽頭間隙の疾患として説明さるに至りたるものなり。而して副咽頭間隙は上は頭蓋底より下は縱隔竇迄連續する所の鬆粗性結締組織にて充たされたる腔所にして、中に交感神經、迷走神經、内頸動脈、内頸靜脈等多數の重要な器官が含有され、此部の炎症は容易に重篤なる合併症を惹起するに至る。前回中國地方會に於て田村君は扁桃腺周圍膿瘍と診斷され度々試験的穿刺を繰返せしも遂に化膿部に達し得ず、其の内炎症は後下方の副咽頭間隙に進行し、更に之より縱隔竇炎を起し死亡せし症例を報告せるが、斯く扁桃腺周圍膿瘍の際副咽頭間隙の如き隠れたる場所に膿瘍の形成さるる事あるは注意すべき所なり。更に此外一般に扁桃腺周圍膿瘍に於ては通例其の膿瘍は後上方に形成さるるが、稀に後下方に隠れたる部位に發生し炎症は氣付かれざるうちに進行する事あり。演者は最近56歳及び26歳の男子2例に於て主訴並所見は扁桃腺周圍膿瘍と略ぼ同一なるが、其の變化は却て口腔底、頸部に著明にして一見ルドウィツチー氏「アングナ」を思はしむるものにして、之に對し同側大臼齒に沿ひ切開を加へ排膿を計り治癒せしめ得たるが、解剖的關係より此膿瘍は扁桃腺周圍膿瘍の一異型として此部に見れたるを知りたり。之等は解剖的關係を充分知悉せざれば動ともすればルドウィツチー氏「アングナ」と誤診さるるものなりと信ず。

以上の症例より考へらる如く扁桃腺周圍膿瘍より副咽頭間隙の如き隠れたる部位に化膿を來す事あれば平素より該間隙の解剖的關係を充分念頭に置くの必要を認むると共に、又扁桃腺周圍膿瘍が解剖的關係より口腔底に進行する事あるをも注意すべきなり。

12. 乳嘴突起炎に際しての錐體尖端の

病變に就て 田 中 文 男

中耳に於ける化膿性機轉が岩様骨尖端に波及し外旋神經麻痺又は三叉神經痛を來す事あるはグラデニゴの徴候として既に充分御承知の處なり。然るに斯るグラデニゴの症狀を呈せざる際に於ても往々病變は岩様骨尖端に進行し、該部に於て頭蓋内に破れ化膿性軟腦膜炎を惹起する事あり。外國に於てはハイマン、ランゲ本邦に於ては當牧室松森、鶴山が耳性化膿性軟腦膜炎屍の岩様骨を組織的に検索し之を實證し居り、從來耳性化膿性軟腦膜炎にして傳染徑路不明なりとされたるものの中斯かる傳染様式を辿るものの尠からざるの明かにせられたるは我々臨牀家の注意すべき點なり。

演者は昭和4年より昭和9年に至る耳性化膿性軟腦膜炎屍の8症例(14箇)の顳顬骨に就て連續切片により錐體尖端の病變を追及し、之に據りて中耳炎の際グラデニゴの症狀無くして岩様骨尖端に病變の進行せる事あり、而も之が頭蓋内に破れ化膿性軟腦膜炎を惹起せるものあるの外、時に又之が自然的治癒を營めるものあるをも知りたり。(幻燈にて組織標本を供覽説明す)

されば演者は此事實と、手術後外聽道よりの分泌多量なるも刺戟症狀無きにより遠からず治癒に赴くものならんとし経過を觀察し居たるものの忽然として腦膜炎として死亡せし從來の苦き自己經驗とを比較對照し、中耳炎にして既にグラデニゴの症狀の存する際は勿論なるも、該症狀の認められざる際と雖も、普通以上に蜂窠の發達せる際又は手術後尙ほ外聽道より多量の分泌物のある場合には岩様骨尖端よりの腦膜炎發生を危惧し、迷路周圍蜂窠より進み出来る丈に岩様骨尖端の蜂窠

を鑿開し、又歐氏管周圍蜂窠をも注意して搔爬し、以て岩様骨尖端の炎症を治癒せしむるに勉むべきなりと述べたり。

閉 會 の 辭 山 口 治

之を以て閉會に致します。次に今般本會幹事として多年お世話下さいました小田博士には文部省在外研究員として近々御渡歐遊ばされることとなりました。誠に慶賀に堪へず謹んで御祝申上ます。尙ほ彼地は氣候風土の異なることなれば専心御自愛下され、御歸朝の曉には新知識を以て吾々を御指導、且從前に増して本會の爲に御盡力下されんことを切に願ひ申上ます。此席に於て甚だ僭越ながら中國地方會々員を代表しまして御祝詞を申上げ併せて御健康を御祈り致します。

當日出席者 (イロハ順)

井口法太郎	石井 研二	原田 輝雄
西村伊勢松	登坂 清喜	岡 貞邦
片木 龍藏	川本 重雄	金澤信太郎
掛谷 令三	河合 廉三	笠井 經夫
吉田 千束	高越澤太郎	桑原 良一
山村 憲	山口 治	山本 春海
福武 敏重	菰口 武夫	東原 尙一
瀬戸忠次郎	杉山 悦子	

教室員

田中 文男	小田 大吉	岡崎 衛生
高原 滋夫	小坂 昭男	大野勤次郎
尾崎 嚴衛	大饗 律治	守屋 誠
佐藤 信也	登坂 清	原 良太郎
淺黄由喜雄	松浦 祐一	山末 一雄
廣瀬 眞治	田村 誠彦	小田淳太郎
土井 眞一	尾錢 二郎	安原 功